

Title	戦争の世紀：リチャード・ライトの『アウトサイダー』
Sub Title	The century of wars : Richard Wright's The outsider
Author	竹内, 美佳子(Takeuchi, Mikako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.75 (2022. 3) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20220331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20220331-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 戦争の世紀

——リチャード・ライトの『アウトサイダー』

竹内 美佳子

リチャード・ライト (Richard Wright, 1908–60) は、アフリカ系アメリカ人の激しい内面を描く『アメリカの息子』 (*Native Son*, 1940) によって、20世紀アメリカ文学の前衛に立った。第二次世界大戦後、アメリカの人種主義に失望を深めたライトは渡仏して亡命作家となり、『アウトサイダー』 (*The Outsider*, 1953) を発表する。ライトの第二長編小説は読者の理解を必ずしも得られなかった。出版直後の書評でハンズベリー (Lorraine Hansberry) は、この作品が『アメリカの息子』に描かれるシカゴ・サウスサイドのようなゲットーの現実を活写しないのは、ライトがアメリカを忘れてしまったからだと述べる (42)。レディング (Jay Saunders Redding) も同様に、海外移住したライトは、自らのルーツを断ち切ってしまったと苦言を呈する (59)。アメリカの批評家は一様に、フランスで亡命作家となったライトが、アメリカに根差すかつての創造力を失ったと考えた。

しかし、『アウトサイダー』が暴力の闇を容赦なく追体験させるのは疑いない。第二次世界大戦後のアメリカに反共の嵐が吹き荒れる渦中において、ライトはこの600頁に及ぶ犯罪小説を書いた。深南部ミシシッピ州から北部大都市へ、さらには国家全体を振り切るようにして欧州へ脱出す

るライトが、冷戦時代に強めた問題意識から作品の駆動力は生起する。「人間は約束をなしうる唯一の存在である」というニーチェの言葉を、ライトは最終第5部のエピグラフに掲げる。「約束」という概念に立って主人公の犯罪心理を解剖するのが、検事ヒューストンである。ライトの創造意図は、批評で看過されがちな犯罪捜査官の視点から読むことにより鮮明化する。本論では、『アウトサイダー』が現代世界に鳴らした警鐘を、冷戦構造と実存哲学という二つの観点から考察する。

## 1. 権力の諸相

閉塞した人間関係に煩悶する主人公デーモンの人生は、シカゴの地下鉄事故に巻き込まれたことから予想外の急展開を始める。転覆した列車の中で九死に一生を得た彼は、自分の名前が死亡者として誤報されるのをラジオ・ニュースで耳にする。彼はこの災難に乗じて過去のしがらみを断ち、別人として生き直すという奇想を思いつく。その矢先に旧友と遭遇する彼は自分の生存を知ったこの友人を殺め、一転、殺人犯となってニューヨークへ逃亡する身となる。偽名を使って都市を彷徨するデーモンは、共産党の集会で知り合う党幹部ギルの求めに応じて、この男のアパートメント・ハウスに寄寓する。ハーンドンというファシストの経営する白人専用の集合住宅にアフリカ系のデーモンを入居させることで、ギルは党の人種統合プロパガンダに彼を引きずり込んだのである。

デーモンは自分を人種的に政治利用するギルを、ファシストの同類項とみて憎むようになる。黒人の入居を知ったハーンドンは規則を破ったギルと対立し、諍いは暴力沙汰にエスカレートする。共産主義者ギルと人種差別主義者ハーンドンが密室で<sup>いが</sup>唾み合う光景を目撃したデーモンは、両者を冷然と撲殺する。さらには、物証を握った党幹部に自分が操られているのに気づくと、権力主義に激昂してこれも闇に葬る。彼は良心の呵責から恋人に自らの正体を明かし、愛する女性を投身自殺に追いやってしまう。作

品は共産党员によるデーモンの射殺という報復劇で幕を閉じる。目を覆うばかりの惨劇を描く『アウトサイダー』が累々と積み上げる死体は、何を意味するのであろうか。

小説の書かれた社会背景に目を向けると、殺伐たる作品世界が時代の暗喩として浮かび上がる。ライトとアメリカ共産党との関係は、シカゴにおける文学活動に始まった。アメリカ共産党は黒人の加入を促す唯一の政治組織であり、差別の激しいミシシッピ州からシカゴに来たライトは、機関誌のプロレタリアニズムに心打たれた。1931年当時、アメリカ労働総同盟の傘下にある組織を含む24の労働組合が、黒人の加入を拒んでいた。アメリカ共産党はそのような時代に黒人を積極的に勧誘した。1931年に起きたスコッツボロ事件では、無実の罪で死刑判決を受けた黒人少年たちの弁護に乗り出す。第一審を担ったのは全米有色人種地位向上協会 (NAACP) の弁護士だったが、アメリカ共産党は NAACP を「黒人奴隷制度を恒常化させる白人資本家の手先」と断じて裁判の主導権を握ろうとした (Howe and Coser 214-15)。アメリカ共産党のスコッツボロ裁判は、黒人社会に勢力拡大する党略の一環だった。共産党の弁護活動により被告少年4人は告訴撤回となり、残る4人は後に保釈、1人は懲役中に逃亡した。

若きライトは当時、進歩的左翼の芸術家組織ジョン・リード・クラブに所属していた。共産主義労働党の創始者リード (John Reed, 1887-1920) の死後に結成された全米のジョン・リード・クラブは、革命的文学運動と距離をおき、「詩や小説を装うスローガンのパンフレットの類」と一線を画していた (Aaron 281)。ライトは文才に注目され、共産党の求めに応じて1932年に入党する。しかし、共産主義インターナショナルの「人民戦線」に従うアメリカ共産党は、1934年にジョン・リード・クラブを解体し、新設の「アメリカ作家連盟」に著名作家を取り込む拡大戦術に転じた。一方的決定に抗議するライトは孤立無援に陥り、自由な創造がアメリカ共産党と相容れないことを知った (Wright, "I Tried to Be a Communist" 136-37)。言論の自由を求めて19歳にして深南部を脱出したライトは、自由の地と

夢見ていた北部で遭遇した言論抑圧に、失望を禁じえなかった。

かくてライトとアメリカ共産党の間に生じた亀裂は、第二次世界大戦をめぐる立場の相違から断絶に至る。ライトは1941年6月初旬にニューヨーク市で行った講演において、アメリカの人種分離した軍隊がナチスと戦う矛盾を指摘した。民主主義国家を標榜しながら自国の人種差別を放置するアメリカを批判したのである。第一次大戦中の1918年8月、米国海外派遣軍の司令官は軍隊内の人種分離を厳命した。「世界を民主主義のために安全にする」というウィルソン大統領の大義は、アフリカ系アメリカ人には民主主義をもたらさなかった。フランクリン・ローズヴェルトも同じであり、大統領官邸補佐官は1940年9月、人種統合の連隊は編成しないという陸軍省の方針を発表した。長年の軍規を変えれば士気と国防を乱すというのがその理由だった。これに対してライトは、基本的人権を保障する権利章典(1791年)、奴隷制を禁じた憲法修正第13条(1865年)、市民権の平等保護を保障した修正第14条(1868年)を真に実体化することが、国家の急務であると主張した。

ライトはこの講演を「我が民族の戦争にあらず」と題し、機関誌『ニュー・マッセズ』に寄稿した(“Not My People’s War,” *New Masses*, 1941年6月17日号)。しかし、6月22日にドイツ軍がソヴィエト連邦に侵攻すると、アメリカ共産党はソ連の防衛を国内の人種問題より優先し、参戦支持に転じた。党は『ニュー・マッセズ』7月8日号に、社説「我らの戦争たる所以」(“Why This Is Our War”)に始まるライトへの反論特集を組む。

アメリカ黒人の感情を代弁するとライトが「我が民族の戦争にあらず」に記すとおり、第二次世界大戦に参戦するアメリカの正当性を問うライトの見地は、当時のアフリカ系アメリカ人社会と一体であった。1936年のベルリン・オリンピックにおけるヒトラーの態度を、アフリカ系アメリカ人は忘れなかった。ヒトラーは黒人選手が優勝するたびに退席し、決して勝者を称えようとしなかった。アフリカ系アメリカ人からみれば、南部の人種隔離政策を放置するアメリカは、ユダヤ人と黒人を差別する敵国ドイ

ツと何ら変わりなかった。黒人社会の指導者は、国内の差別制度が改善されない限り参戦は支持しないという立場をとった。

アメリカ軍需産業は「民主主義の戦争」の名の下に繁栄しながら、アフリカ系の労働者を依然として雇用しなかった。「黒人のための民主主義を獲得することは、民主主義のための戦争に勝つことだ」とプルマン・ポーター組合委員長のランドルフ (A. Philip Randolph) は主張し、10万人の黒人による首都ワシントンへの行進を1941年7月1日に決行すると予告した。前代未聞の事態に、フランクリン・ローズヴェルトは6月25日、政府機関と軍需産業の雇用における人種差別を禁じる大統領行政命令を発した<sup>1)</sup>。ライトが「我が民族の戦争にあらず」を発表した1週間後のことである。

アメリカ共産党が参戦支持を表明した数日後、ライトはアフリカ系アメリカ人の功労者に贈られるスピンガーン・メダルを小説『アメリカの息子』により受賞する<sup>2)</sup>。アメリカ共産党との断絶が決定的になるのはこの時である。ライトは反戦を訴える受賞演説を準備したが、授賞式の行われるテキサス州ヒューストンへ発つ前に、共産党から「無条件の戦争支持」に演説を変更することを要求された。ソヴィエト連邦をナチス・ドイツから守るといふ党是のために、党はアメリカ軍内部の人種差別を容認したのである。言論の自由に対する侵害をライトは最大の屈辱と受け止め、この政治的介入が彼の離党の引き金となった (Fabre, *Unfinished Quest* 226)。政府機関と軍需産業の人種差別が禁じられても、軍隊は人種分離によって人間性を否定しており、参戦は論外だった。

ライトは受賞演説で自らの半生を辿り、人種、政党、信条にかかわらず意思を表現する作家としての使命を語った。第二次大戦は植民地主義・帝国主義国家同士の戦いであり、アフリカ系アメリカ人は平和を追求する声のみに結集するという「我が民族の戦争にあらず」の信念は揺るぎなかった。アメリカ共産党の権力主義を論じるライトの論考「私は共産主義者になろうとした」が『アトランティック・マンスリー』 (“I Tried to Be a

Communist,” *The Atlantic Monthly*, 1944年8-9月号)に掲載されると、ライトに対する党の誹謗は公然化した。

ライトとアメリカ共産党の確執は、『アウトサイダー』の党権力批判につながった。しかし、ライトが共産党離脱後もマルクスの思想に敬意を捧げ続けたことは、最晩年の対談でマルクスを「詩人」と呼んだことが雄弁に物語る (*Conversations* 210)。『アウトサイダー』に登場する党幹部像にはアメリカ共産党批判が色濃く反映されるが、ライトがマルクス思想とスターリニズムを峻別したことは言を俟たない。『アウトサイダー』が告発するのは、スターリニズムがマルクス思想を悪用し、人間の尊厳を否定した事実である。

ライトを苦しめたのはアメリカ共産党だけではない。離党後のライトは皮肉にも、過去の共産党員歴ゆえに連邦捜査局 (FBI) と中央情報局 (CIA) の標的になった。ライトは共産党との確執に加え、国家権力の圧力という二重の不条理に包囲されたのだ。第一作品集『アンクル・トムの子供たち』 (*Uncle Tom's Children*, 1938) が諸外国語に翻訳されたことは、連邦下院「非米活動調査委員会」 (House Committee on Un-American Activities) の注視するところとなった。同委員会は1938年の設置当初は、国内のナチ活動を取り締りの対象としていたが、戦後は共産主義者をターゲットにした。特にニューディール政策下の「連邦作家計画」 (The Federal Writers' Project) における共産主義者の影響力を、委員会は調査対象の一つにした。共産党員として連邦作家計画で長期間活動したライトは、非米活動調査委員会に「異分子」の烙印を押された (Mangione 324)。ライトが『1200万人の黒人の声』 (*12 Million Black Voices*, 1941) を出版すると、国家批判的な論旨が戦争遂行の障害になるとみた FBI は、扇動容疑でこの作家を告発すべく調査に乗り出した。ライトの共産党離脱は、1942年10月14日付けで FBI ファイルに記録されたが、同時にフーヴァー長官 (John Edgar Hoover) の人物調査命令が下り、FBI は1943年、ライトを「共産主義活動の重要人物」に指定した (Gayle 146-53)。

ライトの共産党との決裂は先述のとおり、1944年の論考「私は共産主義者になろうとした」によって公となった。しかし、FBIはライトの批判が、共産党よりむしろ国家に向けられているとみた。「共産党が国家の圧力に屈し、黒人の地位向上に闘争的でなくなった」ことをライトは批判しているのだから、論考の本質は「アメリカ的社会様式の否定」にあるとFBIは判断したのだ。人種問題に挑戦的な作家は、共産党を離れても危険人物に変わりないと国家機関は結論づけた。FBIの安全保障インデックス・カードは、戦争妨害者と政治的「危険分子」を手続きなしに逮捕することを目的とし、最盛期には1万5千人がリストに載った。フーヴァーFBI長官は1945年、リチャード・ライトの「人種問題に対する戦闘的態度」を理由としてインデックス・カードの作成を指示した (Robins 285)。

ライトは、1940年のアメリカ南部旅行の際にメキシコとの国境でパスポートを没収されたのに続き、1941年と45年に国務省から旅券交付を拒否された。FBIは1920年代から、黒人新聞を扇動罪で発禁にすべく標的にしていた (Rowley 251)。ライトは1941年、通信社アソシエイテッド・ニグロ・プレスの記者として、ロシアと東アジアに旅することを計画した。黒人報道機関がアメリカ軍の人種分離に批判を強めるなか、国務省は政府に批判的なライトのような黒人記者に旅券の発行を拒んだ。ライトが1945年に渡仏する際も、国務省は沈黙を保った。フランス在住の作家ガートルード・スタイン (Gertrude Stein, 1874-1946) がパリの米国大使館に陳情し、さらにはニューヨークのフランス文化局長をしていた人類学者クロード・レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908-2009) がフランス政府の招聘という形をとることにより、ライトはやっとの思いで旅券の交付を受けることができた (Rowley 328-29)。冷戦時代のアメリカ国家機関は、アメリカに批判的な言論活動をする作家が出国することを強く警戒し、ライトへの追跡の手を緩めなかった。

ライトの文学活動は、第二次世界大戦から冷戦にかけてのアメリカ軍拡張期に重なる。1947年に中央情報局 (CIA) が創設され、49年の北大西洋

条約機構 (NATO) 創設とソ連の核実験に続き、50年にはトルーマン大統領の水爆製造命令が下る。この緊迫した政情下に、アメリカのマーシャル・プランと人種問題をフランスで公然と批判するライトは、アメリカ政府にとって実に剣呑な存在だった。1947年の国家安全保障法により、国益に反する海外在住者の旅券剥奪と本国送還が可能になると、アメリカ国家機関はフランス駐留の諜報員を通じて、ライトの言動に対する監視を強化した。

当時、ライトはパリの知識人と交流を深め、広範な社会活動に携わっていた。すでに渡仏前からサルトルおよびポーヴォワールと親交を結び、自伝『ブラック・ボーイ』(*Black Boy*, 1945)のフランス語版出版にはアルベール・カミュの助力を得た。実存主義の書物がほとんど英語に翻訳されていなかった時代に、ライトはフランスの前衛作家たちと協働するようになる。汎アフリカ主義、実存主義マルキシズム、反植民地主義にライトをいざなったのも、パリの文化的環境であった (Gordon and Zirakzadeh 6-7)。サルトルとカミュが「民主主義革命連合」(*Rassemblement Démocratique Révolutionnaire*)を設立するのをライトは助け、セネガル系作家の創刊した『アフリカ勢力』(*Présence Africaine*)の支援者にもなった。

しかし、これらの組織はFBIとCIAの監視対象となり、「人種問題に関するライトの言動は東西冷戦下の国益を損なう」と1952年3月3日付のFBIファイルに記録された (Gayle 206)。特に「仏米協会」(*The Franco-American Fellowship*)は、「リチャード・ライトがパリに組織した共産主義集団」としてアメリカ国務省の注視するところとなる。仏米協会の主要目的は、黒人を雇用しない米国系企業と病院に対する抗議活動であったが、CIAとFBIはこれを「共産主義ドクトリンの拡散組織」と位置づけて監視対象とした。協会内部に諜報員が潜入しているのを知ったライトは、1951年に代表を退く (Rowley 396-97)。

反共ナショナリズムは出版界にも浸透し、ライトの論考「私は亡命を選ぶ」("I Choose Exile")は、1950年に『エボニー』(*Ebony*)が、52年には『ア

トランティック・マンズリー』が相次いで掲載拒否した。進歩的な言論を排除するアメリカ出版界の風潮は、対外イメージを損なう表現活動の封じ込めを図る国策の反映だった。ライトのようなアフリカ系の国外移住者が人種社会の実態を公にして、国家の人種政策を問題化することにFBIは神経を尖らせていた (Dow 47)。ライトはアメリカへの強制送還を恐れ、『アウトサイダー』を出版する1953年までには公的組織活動から身を引くようになる。「FB 監視ブルース」(“The FB Eye Blues”)というアイロニカルな表題の詩に、ライトはこう綴る。

Everywhere I look, Lord / I see FB eyes  
 Said every place I look, Lord / I find FB eyes  
 I'm getting sick and tired of govern'ment spies. . . .  
 Breaks my heart in two, Lord / And I just can't forget  
 Said it breaks my heart, Lord / And I just can't forget  
 Old jealous FB eye ain't ended yet. (Fabre, *World* 249-50)

何処を見ても FB 監視／四方八方、FB 監視  
 政府のスパイどもにはうんざりする。(中略)  
 心を真っ二つに切り裂く／あのやり口／心を切り裂く／あのやり口  
 嫉み深い FB 監視はとどまるところを知らぬ。

国家の監視下に置かれたライトの神経症的なまでの苛立ちが読み取れる。ナショナリズムが猛威を振るう冷戦時代に、アメリカという国家は自由の価値を見失い、個を埋没させようとするかにみえた。

国民の自由を政治的に抑圧するアメリカは、人間に対する根源的な問いを放棄した漂流国家としてライトの目に映った。「現代最大の危機は、人間とは何かという感覚や概念そのものが失われるかもしれないことです」とライトは1947年9月、サルトルに語った (Fabre, *Unfinished Quest* 322)。

冷戦下のアメリカ・ナショナリズムとソヴィエト・スターリニズムとが全体主義的な力の発揚において連動し、人間の自由を殲滅するという悪夢を、ライトは身をもって予感していた。国家権力に包囲されたライトは、人間の危機に瀕した恐怖と絶望の世界像を、犯罪小説『アウトサイダー』に描き上げる。

## 2. 漂流する悪魔

全体主義的な諸力を主人公デーモンに収斂したライトの意図は、検事ヒューストンの視点から解釈することにより鮮明になる。アフリカ系の犯罪者と白人検事との「人種を超えた繋がり」(Li 271) に人間の可能性を見出す批評もあるが、両者の対決が人種間の共感を超えた問題へと及ぶことに注目せねばならない。ヒューストンとデーモンの対話を、最初の段階から解読してみよう。

地下鉄転覆事故の後、自分の生存を知った旧友を闇に葬ったデーモンは、ニューヨークへ逃亡する。その列車内のダイニングカーで、偶然にも向かいの席に姿を現すのがニューヨーク地区検事ヒューストンである。二言三言交わしただけで、デーモンはこの人物が最も恐るべき存在であることを直観する。法の番人であるのに加え、人の心を掘り下げる力をヒューストンは予感させたからである。デーモンのようなアメリカ黒人が、社会の内側にいながら同時に外側にもいるという二重視覚 (a double vision) をもつことを、ヒューストンは理解している。ダイニングカーを退席したデーモンを、ヒューストンはコンパートメントまで訪ねて来る。ヒューストンの視線を浴びたデーモンは、「罨が作動したかのような」感覚に囚われる (*Outsider* 168)。

ヒューストンは自分が検事でありながら社会のアウトサイダーであることを告白し、デーモンの興味を誘発する。背中に瘤状の奇形があるヒューストンは幼少期から奇異の目で見られ、自分を社会のアウトサイダーと感

じてきた。ところが自己嫌悪の源でしかなかったこの不遇が、逆に自分を解放したと彼は言う。社会の周縁的位置におかれ続けたヒューストンは、疎外された者への洞察力を得たのである（169）。デーモンはこの検事が、アウトサイダーの内面世界を知り抜く同族であることを直観し、言い表しようのない引力と恐怖を感じる。

文明社会の法を破る人間に共感するというヒューストンは、次のように持論を語りながら無意識のうちに尋問を開始しているとも言える。

“But it all depends upon *how* the laws are broken. My greatest sympathy is for those who feel that they have a *right* to break the law. But do you know that there are not many criminals who feel that? Most of them almost beg you to punish them. They would be lost without the law.” (*Outsider* 171)

社会の法を破る人間についてヒューストンが問うているのは、法の破られ方である。アウトサイダーを自任するヒューストンの共感は、法を犯す権利があるという矜持を抱く人間に向けられる。かかる矜持のある犯罪者は稀であり、並みの罪人は法が無ければ自分の存在意義を見出せず、結局は罰せられることを願っているものなのだ。ヒューストンは犯罪者の心理をそう分析する。

検事の発言は、二種類の犯罪者を措定したニーチェの考え方を想起させる。すなわち、「力への意志」に基づき自責の念なく行動する怪物的な犯罪者と、衝動的で自分の罪に耐え切れない墮落した犯罪者である。前者のような「アブノーマルな者」による支配を、ニーチェは「偉大な政治」と呼んだ。その統治者とは、「立法者として行動する哲学者」のことである。彼らは因習からの自律性を保つがゆえに「犯罪者」と見做される（Balke 51-59）。検事ヒューストンが認める犯罪者もまた、外的権威に囚われず、自ら立てた道徳律に従う「自己統治者」である。よって彼は、デーモンの

犯罪のごとき反社会的情念の暴発を、駆逐さるべきものとして執念深く追いつめる。

逃亡先のニューヨークでギルとハーンドンに出遭ったことから、デーモンの人生は破滅の道を突き進む。彼は自分を意のままに飼い馴らそうと企む権力者を憎悪して、連続殺人を犯す。しかし、冷酷な衝動に駆られて最終決着をつけてゆく彼は、反動的な権力意志に対する批判自体が反動化してしまうという絶望に、帰着せざるをえない。二人の全体主義者を同時に殺めるデーモンは、自分を潔白と考えて憚らない。両者は主体性を破壊するスターリニズムと、生を切り捨てるファシズムの象徴だからである (*Outsider* 197)。

だが、独善的暴力に陥ったデーモン自身が、全体主義化する世界に救いようもなく浸潤されている。我に返った彼は、「無法という名の伝染病」に侵された自分に愕然とする。Perhaps he was staring right now at the focal point of modern history: if you fought men who tried to conquer you in terms of total power you too had to use total power and in the end you became what you tried to defeat (328)。自分がまさに現代史の焦点を凝視していることを彼は意識する。絶対的な支配者と戦おうとすれば、自分も絶対的な力を行使せざるをえず、打ち負かそうとした相手と遂には同類項になってしまうと彼は考える。全体主義者と同じ土俵で戦うこと自体が敗北であり、醜悪な世界像に自らが回収されてしまう悪循環を、デーモンは20世紀の歴史に重ね合わせるのだ。スターリニズムとファシズムとの戦いを機に第二次世界大戦に参戦したアメリカは、大量殺戮によって戦争に終止符を打った。殺意に満ちた世界戦争と東西冷戦の中心点に、デーモンは自分の絶望的暴力を意識化する。

異常な連続殺人を捜査するニューヨーク地区検事ヒューストンと、デーモンは再会する宿命になる。ヒューストンは、共産主義者ギルとファシスト・ハーンドンの決闘を「独ソ戦争の再現」と呼ぶ。両者は、弱者の飢餓感を私欲のために動員するスターリニズムと、民族大虐殺によって人間の

生を無意味化したナチズムの縮図である。ヒューストンによれば、スターリニストとファシストを同時に殺害する動機をもち得るのは、第三の絶対主義者のみである。至高の法を自任して世界の所有者になろうと欲するこの者は、自分の前に立ちはだかる絶対者を、同じ絶対者の力にかけて抹殺できると思い込むのだ。この第三者は「力」だけが二人の暴君を無力化できると考え、衝動と無法を二人の絶対者と共有している。自分の衝動に怯える無法者だけが恣意的な掟を作るのであり、かかる第三者をヒューストンは「20世紀の縮図」と呼ぶ(379)。この第三者は自分の行為を正当化してやまず、自分の「正しさ」が脅かされると相手を撲滅するための攻撃に出る。

全体主義者らを撲殺した時の物証を党幹部に握られたデーモンは、自分の絶対的自由のために相手を抹殺することを正当化する。元来、幹部ヒルトンに対する憎しみの源は、黒人党員の一人を肅正したことへの人種的な怒りにあった。ヒルトンは黒人党員が西インド諸島からの不法移民であることを入国管理局に密告し、トリニダードへ強制送還に処した(387)。デーモンの憎悪はこの事件に発するが、今や自分が殺人の物証を握られ、権力欲の道具になろうとしているのを察知すると、ヒルトンに精神的奴隷として所有されることを拒絶し、銃口を突きつける(400)。かくして3人の全体主義者を抹殺したデーモンは、自分が殺めた者たちの同類となって悪循環の底に堕ちる。彼は愛する女性イーヴァと人間関係を築いても、正体を知られる前にいっそ彼女の息の根を止めたいとさえ願う。自分の制御不能な思考が、イーヴァの体現する「善への信頼」を破壊しようとする終末的光景に彼は慄然とする。As he stood there in the dark straining at a decision, he could see that the grinding mechanisms of man's thought could destroy all of life on earth and leave this watery globe bare of the human beings who had produced the thinking (442)。暗闇に立ち尽くし決断を下そうと懊悩する彼は、暴虐な思考のメカニズムが地上の全生命を破壊し、思考を生み出してきた人類を瑞々しい地球上から一掃する光景に戦

く。デーモンの幻視する人類滅亡に、ライトは核時代の末路を予示した。

ニューヨーク地区検事は証拠なき膠着状態のなか、シカゴ地下鉄事故で死亡者とされながら偽名を使って生き永らえているのがデーモンだと突き止め、シカゴ市警に家宅捜索を依頼する。注目すべきは、検事の掴んだ決め手がデーモン宅に残された哲学書だったことである。ニーチェやハイデggerを含むデーモンの蔵書一覧をシカゴ市警から入手したヒューストンは、犯人像を「危険な思想」の中でのた打ち回ってきた人物と見定める(560)。完全犯罪に立ち向かう検事ヒューストンは遂にデーモンを射程に収め、「お前は私に、ただ私だけに告白したのだ」と述べる(571)。ヒューストンは思想のもう一人の読み手として、事件の確証をデーモンの蔵書に捉えたのである。

実存哲学への耽溺から犯罪に逸脱するデーモンのありようは、20世紀の史実と重なり合う。デーモンが陥ったと考えられる誤謬は、思想の両義的言説から一面的に断片を抽出したことである。「人間は約束をなしうる唯一の存在である。」(“Man is the only being who makes promises.”)ライトはニーチェのこの言葉を『アウトサイダー』最終部に掲げた。エピグラフの典拠であるニーチェの『道徳の系譜』には次のような記述がある。

生が、すなわちその根本機能において侵害的、暴圧的、搾取的、破壊的にはたらくものであって、かかる性格なしにはまったく考えられないものであるかぎりには、侵害も暴圧も搾取も破壊もそれ自体としては何ら〈不法なもの〉でありえないことは勿論である。(『善悪の彼岸 道徳の系譜』450)

かかる表現の悪用を企てる政治権力によって、現実にニーチェ思想が歪曲された経緯は、マンフレート・リーデルの研究に詳しい。第一次世界大戦中にプロイセン・ドイツは、ニーチェ思想を軍国主義の政治目的に悪用し、権力賛美の思想を捏造することにより精神面の軍備強化を図った。か

くしてニーチェ思想の悪用が、ヨーロッパの随所に深い痕跡を残した（リーデル 49）。1930年代には国粋政治的なニーチェ主義によってヒトラーへの橋渡しが企てられる。「戦争が万事を聖化すると考える君主型人間の代弁者」というナチズムの歪曲したニーチェ像が偶像視されるに至る（210）。

こうした中でハイデッガーが1936年から40年にかけて行ったニーチェ講義は、「ナチズムに対する精神的な抵抗の最も重要な記録」とされる（ビヒト 171）。ニーチェのいう「英雄的なもの」は、権力発揚の対極をなす資質である。「自分の最高の苦悩と最高の希望とに向かって同時に突き進んでゆくこと」をニーチェは「英雄的」と呼ぶ（『悦ばしき知識』284）。ハイデッガーはこれを踏まえてニーチェの「英雄的なもの」を、「独善的勝利に酔い痴れないこと」と釈義した（ハイデッガー 334）。

ライトはニーチェの著作を第二次世界大戦期の1940年から45年にかけて購入している（Fabre, *Richard Wright* 116-17）。ナチズムによる思想の歪曲とそれに対する抵抗がせめぎ合う時期に、ライトはニーチェの著作を読んだ。『アウトサイダー』出版後の1955年、フランスのメディアとの対談で自らの英雄を問われたライトは、『ツァラトゥストラ』の体現するニーチェを挙げた（*Conversations* 165）。ニーチェの「力への意志」に対するライトの理解が、歪曲された権力礼賛と異次元なのは言うまでもない。

ニーチェ思想の誤読がアメリカ大衆に広がっていたことを、『アウトサイダー』は謎の二重殺人を報じる新聞記事に象徴化する。記事の風刺画は、共産主義者ギルとファシスト・ハーンドンが醜悪な形相で殴り合う巣窟を描く。「悪名高きカール・マルクスが唱道する共有財産の退廃思想と、狂人フリードリヒ・ニーチェの超人思想とに毒された輩」と風刺画の説明書きは揶揄する（*Outsider* 437）。このカリカチュアは、マルクスとニーチェをそれぞれスターリニズムとファシズムの祖とみなす大衆社会の誤解を反映する。

デーモンは、全体主義を批判するアメリカ自体が同類項であるのを見てとる。「反共と反ファシズムの側が方策に窮し、全体主義者の手法で全体

主義の脅威と戦うなら、現代社会が全体的・絶対的なものに覆い尽くされるのは必至である」(491)。スターリニズムとファシズムは、神なき現代に続々と到来する全体主義の予兆であり、新聞の戯画は「全体主義的な意図の巧妙きわまる偽装」なのだと彼は考える。反共・反ファシズムを叫ぶ者自身が全体主義者と化しているのだから、戯画は「一種の転倒した親共産主義的、親ナチズムのプロパガンダ」という訳だ(436-37)。

ヨーロッパの思想に対するアメリカの偏見は、第一次世界大戦後から始まった。1921年と24年の移民割当法によって移民を制限した政治的排斥主義は、外国の思想家に対する反感と軌を一にしていた。とりわけフロイト、マルクス、ニーチェは「アメリカの思想を墮落させるヨーロッパ大陸の思想家たちの邪な<sup>トリニテ</sup>三位一体」とみなされた(Ratner-Rosenhagen, *Ideas* 119)。かかる状況に大きな変化をもたらしたのが、1930年代から40年代前半にかけて、ナチズムを逃れてアメリカへ大量移住したドイツ語圏の知識人たちだった。

英語圏におけるニーチェ思想の受容には翻訳の壁があったうえ、イタリアのファシズムとドイツのナチズムがともにニーチェを政治利用した事実が悪影響を及ぼした。アメリカで偏見に満ちたニーチェ受容が改まるのは、ナチスの迫害を逃れてアメリカに亡命したユダヤ系ドイツ人の著作を待たねばならなかった。亡命者たちは、ナチスが称揚したのとは全く異なるニーチェ像を共有しており、それはまさしく「ヒトラーが強制的に排除したニーチェ」であった(Ratner-Rosenhagen, *American Nietzsche* 227)。

ニーチェが英語圏の読者に誤解されていると考えたウォルター・カウフマン(Walter Kaufmann, 1921-80)の訳業が果たした役割は大きい。カウフマンは1939年、反ユダヤ主義のナチス・ドイツを逃れてアメリカへ移住した。ドイツ語圏の知識人が集団となって大移動していた時期に当たる。カウフマンによるニーチェ作品の英訳は1950年から60年代にかけて刊行された<sup>3)</sup>。

ライトが『アウトサイダー』を執筆した1950年代初頭に、アメリカに

おけるニーチェ受容の歪みを洞察していたのは明白である。デーモンの蔵書を洗い出す検事ヒューストンは、全体主義化する世界による思想の歪曲と同じ誤謬を、デーモンの犯罪に読み取る。ヒューストンは、デーモン自身が「20世紀の縮図」であることを明らかにする。神なき虚無の世界で自ら神となり、世界の所有者になろうと欲するこの衝動を、ヒューストンは「漂流する悪魔」(“a restless, floating demon”)と呼ぶ(*Outsider* 566)。

全体主義化する世界を満たす「漂流する悪魔」は、すべての衝動が否定的で方向性をもたないことを特徴とする。“You little gods who traffic in human life, who buy and sell the souls of men, why couldn't you have not made a trade? Well, I guess that maybe you couldn't trust each other, huh? . . . Look at Hitler and Stalin” (568)。人界を漂流して人の魂を売り買いする「卑小な神たち」の最たる問題は、他者を信頼できぬことであり、この種の権力独占欲はヒトラーとスターリンを見ればわかる。ヒューストンはそう述べて、デーモンを「卑小な神たち」の一人と断じる。暴力の連鎖は反動的な力の勝利にはかならず、デーモンは、人間の現象世界に多様な姿で変転しながら自身の力と質とを保有し続ける「ニヒリズム／無への意志」としての悪魔を象徴する。ヒューストンの指定する犯人像とは、生に対する様式や訓育を欠くがゆえに衝動の餌食となった人間である。

ニーチェによれば、地上の法が提示するものは「反動的感情に対する闘争であり、能動的で攻勢的な権力の側からするこの感情との戦いである(『道徳の系譜』449)。ところが人間の歴史は現実には、人種・民族・階級・宗教・国家等の集合体が、人間本来の能動性を歪曲する運動となって現れる。人間を飼い馴らし、反動的な力の保存伝播に奉仕させるこうした作用の発現を、ニーチェは「悪魔」と名づけた。悪魔は否定の精神、否定の力であり、外見的に対立しているかにみえる諸々の役柄の中に浸透し、それを演じている(Deleuze 129, 180)。自らを神の座に据えて悪魔に導かれるまま突き進んだ人間が、「一切は空しい」という意志の無に辿り着くとき、ニーチェはこれを「最後の人間」と呼んだ(『ツァラトゥストラ』30-32)。

デーモンもまた自らが、虚無の悪夢を生きる無数の「最後の人間」の一人であるという絶望に行き着かざるをえない (*Outsider* 585)。「人間はたぶん何ほどの者でもない。」(“Maybe man is nothing in particular”) (172)。初対面のデーモンとの会話で記憶に刻んだこの発言が、ヒューストンの最終的推断に結びついてゆく。犯人はこの世の幻想や偽善を一層ずつ引き剥がし、剥き出しの欲望に突き当たると、その虚無的衝動を真理の核心と錯覚したのである。

### 3. 約束をなしうる人間

「人間は約束をなしうる唯一の存在である。」ニーチェのこの箴言を、ライトは最終第5部のエピグラフに掲げた。「約束することのできる動物を育成すること、これこそ、人間に関する本来の問題ではなからうか。」エピグラフの典拠である『道徳の系譜』第二論文は、そう説き起こす(ニーチェ『道徳の系譜』423)。ドゥルーズ (Gilles Deleuze) によれば、この実存的な問いは「力への意志の認識根拠と存在根拠」という概念によって把握される(165-66)。力への意志の「認識根拠」とは、ニヒリズムのことである。病が身体を認識させるのと同様に、ニヒリズムは「力への意志」を、その一側面を構成するにすぎない否定的形態において、認識可能なものとする。力への意志の認識されていない別の側面とは「肯定」であり、これは力への意志から否定的なものを一掃する、同じ意志の「存在根拠」である。「認識根拠」をその反対物に転換する質と捉え、ニヒリズムを克服するような「存在根拠」をそこに見出すこと。力への意志のこうした根本的な質的転換、つまりニヒリズム自身によるニヒリズムの克服こそが「約束」の意味するものである。

検事ヒューストンは意図的に約束を破ることにより、容疑者デーモンに約束の意味を突きつける。ヒューストンはまず、デーモンとの会食を約束していた店に姿をみせない。代わりに現れた二人の刑事がデーモンを連行

し、約束は急転直下、職務尋問に変容する (*Outsider* 497-99)。ヒューストンは追及の末に、意表を突く罰を下す。デーモンを不起訴放免とすることにより、法廷と刑罰という人間の約束を奪い去り、彼を宙づり状態に放置するのだ。至上の法を自任した完全犯罪の容疑者に対し、自己の裁判官と刑執行人にならしめ、その任を全うさせることがヒューストンの罰であった。

ニーチェによれば刑罰は、人間を自らの反動的な力の責任者として位置づける。法は本来、人間の反動的な力を訓育し、活動的になり得る能力を与え、この能力そのものの責任を人間にとらせる人類の能動性の現れである (*Deleuze* 127)。この能動的活動である文化の産物が、「約束をなしうる人間」である。最終的に「反動的な力の主人」となったこの者は、自らを訓育してきた過程から解き放たれ、もはやいかなる法廷にたいしても責任のない「主権的个人」あるいは「自由な意志の支配者」となる。

不起訴放免というヒューストンの決着は、「不当に与えられた自由」という永久の拷問に処することで、デーモンを意味の虚空に遺棄する。「これは君と君自身との関係以外の何ものでもない」と検事は言い渡す (*Outsider* 572)。デーモンを自らの反動性に独り向き合わせ、自分自身との約束へ差し向けることが、ヒューストンの冷厳な約束遂行の形であった。自分が罰せられないと知った瞬間に、デーモンは意味の真空に宙づりとなる。人間世界の約束を破り続けた「漂流する悪魔」は、世界の側から約束破棄されるという究極の罰を受けたのである (573)。

共産党員による報復の凶弾に倒れるデーモンは、自分を追い詰めた挙句に見限ったヒューストンと、最後の対面を果たす。認識の追跡者となってデーモンの自己開示を見届けようとする検事がデーモンから引き出すのは、「人間は、決して破ってはならない約束である」 (“Man is a promise that he must never break”) という言葉である (585)。自分自身と出会うことを人間に求めたいと、断末魔のデーモンは意味の虚空に向かって語る。未来への長い意志をもって自らと出会う者になるという命題は、ニヒリズムに歪め

られた能動性をいかに回復しうるかという問いに換言できよう。

ヒューストンは連続殺人犯の内面世界を、価値転換しうる地獄と捉える。“He must be something of an inferno, hunh? Something like the original chaos out of which life and order is supposed to have come. . . . I wonder if such men have any value? Might not they be the *real* lawgivers . . . ?” (380) 犯人は一種の灼熱地獄であり、生命と秩序がそこから生じた原初的カオスのようなものではないかと、ヒューストンは問う。犯人の内面を占める混沌たる負の情動から、真の立法が生まれる可能性を検事は示唆するのだ。力の無法状態を、生と秩序とが潜在する原初的カオスとみなすヒューストンの考え方は、ニーチェの言う「反動的な権力意志の能動化」と通底する。

デーモンの犯罪は、他者に負うべき道義の全てを冷笑し、理不尽にこれを侵害したことである。自分の信じる「正義」のために死闘を演じ続ける人間の墮落を、いかに回避するのか。デーモンの辿り着く問いによって、ライトは現代社会に警鐘を鳴らす。“The most ludicrous and tragic spectacle on earth is to see a powerful nation bleeding itself white to build up vast heaps of armaments to put down a menace that cannot be put down by military means at all” (491-92). 軍拡に心血を注ぎ、軍事的手段では抑制しえない脅威を武力で解決しようとする世界の現実を、デーモンは客観化する。

否定の衝動に支配された虚無的世界の末期を、デーモンは自らの死をもって予言する。同時に彼は、薄れゆく最期の意識にヒューストンという人間的な法の再来を迎え入れ、自己立法者への変貌に向かって一步を踏み出す。人間界を漂流する悪魔は、遂に自らの反動性を攻略する能動的な力の側に立ち、創造的自己破壊によってニヒリズムの克服を遠望する。

世界大戦による大量殺戮の後、東西に分断した世界が新たな価値観を構築できずにいるなか、「自由とは何か」という根源的な問いがライトを実存主義へ向かわせた。アメリカの外側に身をおいたライトは、冷戦時代の

アメリカと世界を『アウトサイダー』のディストピアに照射した。全体主義的な暴力の連鎖が人類滅亡に帰結する未来図は、ライトがデーモンに投影した核時代のリアリティである。

ライトは1947年にパリへ移住した後、1960年に亡くなるまでフランスを永住の地とした。フランスにおいてライトは祖国より遥かに大きな自由を享受できた。「アメリカ人が至る所で自由を口にするのは、アメリカに自由が欠乏しているからである」(*Conversations* 123)。ライトはアメリカのパラドックスをそう看破する。アメリカで発表を拒否された未刊の論考「私は亡命を選ぶ」に、ライトは自らの「非米性」を次のように記す。

My Un-Americanism, then, consists of the fact that I want the right to hold, without fear of punitive measures, an opinion with which my neighbor does not agree; the right to travel wherever and whenever I please even though my ideas might not coincide with those of whatever Federal Administration might be in power in Washington. . . . These un-American sentiments add up to a fundamental right which I insist upon, the right to live free of mob violence, whether that violence assumes the guise of an anonymous blacklisting or of pressure exerted through character assassination. (“I Choose Exile,” unpublished ms., pp. 1–2, quoted in Fabre, *World* 177–78.)

国家権力と異なる意見を、処罰の恐れなく表現できるという当然の権利を望むことが、ライトの「非米性」の本質であった。

異論に「非米」の烙印を押す国家の政治的不寛容は、アメリカ共産党から受けた迫害以上の窒息感をライトにもたらした。冷戦時代のアメリカは国民をマッカーシズムの恐怖に陥れ、国家批判の言論を国益に反するとして抑圧した。ライトは共産党員歴と人種差別批判ゆえに国家機関に追跡され、フランスで亡命作家となった後も、終生FBIに監視された。反共を

掲げるアメリカが、全体主義の手法で超監視体制を国外にまで及ぼしている現実を、ライトは身をもって体験した。上記の論考は、誹謗を「人身攻撃」(“character assassination”)と表現し、自らを取り巻く「暗殺」の恐怖をこの一言に凝縮する。

ライトが自らの「非米性」を通じて堅持したのは、言論の自由を守り抜く信念である。ライトは1950年代後期にフランスで行った講演の覚書に、「私はアメリカ人か」という自問に対する87の答えを書き留めた。その一つはこう記す。「私はアメリカ人だが、私の中のアメリカ性を信ずるに足るものとするために、私はむしろアメリカ人であることを放棄しよう。」(“I am an American but I would rather surrender being an American so that the American in me can be believed”) (Fabre, *World* 189).

アメリカの人種主義、帝国主義、政治的不寛容をライトは到底容認できなかった。だがアメリカを永久に離脱しながらも、ライトが表現した実存的苦悩と自由への探求は故国の土壌から生まれた。ライトは独立宣言とアメリカン・ルネサンスの精神に普遍的価値を見出す。ナチズムを逃れてアメリカに移住した亡命者とは逆の軌跡を描き、ライトは流浪の作家となって欧州へ渡った。アメリカ深南部から北部、欧州へと遠心力的に逃避しながら、ライトはアメリカ精神に向かって回帰する。

「私はアメリカ人だが、おそらくあなた方の忘れてしまった種類のアメリカ人だ。自己を恃み、権力に与せず、自主独立の精神を讃え、個の人格に宿る神聖さを尊ぶ、そのようなアメリカ人である」(“I am an American but perhaps of the kind you have forgotten, self-reliant, irritated with authority, full of praise for those who can stand alone, respecting the sacredness that I feel resides in the human personality”) (Fabre, *World* 189). 自己を恃むという言葉には、エマソンの「自己信頼」(“Self-Reliance”)が明らかに反響する。ライトの警句を形づくる逆説は、アメリカ精神の核心を蘇らせながら、「アメリカ人」という国家の枠組みを脱して普遍的人間性へと超越する。

1776年の独立宣言に「自明の真理」と謳われた不可侵の人権を求める

ことが、冷戦時代にライトが背負った「非米」の本質であった。「私はアメリカ人だが」に始まるパラドックスは、ライトの「非米性」を「普遍性」へと解き放つ。「国家とは、すべての冷ややかな怪物たちのなかで、最も冷ややかな怪物のことだ。」ニーチェはこう記し、近代国家を「新しい偶像」と名づけた。「国家が終わるところ、そこに初めて、余計者でない人間が始まる。そこに、必然的な者の歌が、ただ一回的な、かけがえのない旋律が、始まるのだ」(『ツァラトゥストラ』88, 91-92)。アメリカ南部の人種テロリズム、政党の組織的抑圧、国家の監視活動に曝されたライトは、生涯を通して権力の諸相と対峙し続けた。亡命作家ライトの距離感覚が生んだ『アウトサイダー』は、ナショナリズムの呪縛を超えて人間性の回復に向かうことを、現代世界に希求する書である。

## Notes

- 1) ローゼヴェルト大統領が発した政府機関と軍需産業における人種差別の禁止命令は、リンカーン大統領が1863年1月1日に発した奴隷解放宣言以来、人種問題に関わる最初の大統領令である。
- 2) 全米有色人種地位向上協会 (NAACP) を設立した批評家スピングァン (Joel Elias Spingarn, 1875-1939) によってメダルは創設された。1941年6月27日にヒューストン市のバプテスト教会で行われた授賞式においては、全国都市同盟 (National Urban League) の機関誌『オポチュニティ』 (*Opportunity: A Journal of Negro Life*) の編集長カーター (Elmer A. Carter) がライトにメダルを授与した。授賞式の開催されたNAACP大会最終日には聴衆が場外に溢れ、800人余りが野外で拡声器を通して演説を聞いた (Rowley 253-54)。
- 3) カウフマンはアメリカの読者のために『ニーチェ』 (*Nietzsche: Philosopher, Psychologist, Antichrist*, 1950) を著した。しかし、ニーチェに深い影響を与え続けたエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) を取り上げずにアメリカの知的コンテクストから欠落させたことは、Ratner-Rosenhagen の指摘するとおりである (*American Nietzsche* 244)。

## Works Cited

Aaron, Daniel. *Writers on the Left: Episodes in American Literary Communism*. Columbia UP, 1992.

- Balke, Friedrich. "From a Biopolitical Point of View: Nietzsche's Philosophy of Crime." *Nietzsche and Legal Theory: Half-Written Laws*, edited by Peter Goodrich and Mariana Valverde, Routledge, 2005, pp. 49–65.
- Deleuze, Gilles. *Nietzsche and Philosophy*. Translated by Hugh Tomlinson, Continuum, 1986.
- Dow, William E. "Paris and Ailly." *Richard Wright in Context*, edited by Michael Nowlin, Cambridge UP, 2021, pp. 44–53.
- Fabre, Michel. *Richard Wright: Books and Writers*. UP of Mississippi, 1990.
- . *The Unfinished Quest of Richard Wright*. Translated by Isabel Barzun, U of Illinois P, 1993.
- . *The World of Richard Wright*. UP of Mississippi, 1985.
- Gayle, Addison. *Richard Wright: Ordeal of a Native Son*. Peter Smith, 1983.
- Gordon, Jane Anna, and Cyrus Ernesto Zirakzadeh, editors. *The Politics of Richard Wright: Perspectives on Resistance*. UP of Kentucky, 2020.
- Hansberry, Lorraine. "A Review of *The Outsider*." *Jet Magazine*, 26 Mar. 1953, p. 42.
- Howe, Irving, and Lewis Coser. *The American Communist Party: A Critical History*. Frederick A. Praeger, 1962.
- Kaufmann, Walter Arnold. *Nietzsche: Philosopher, Psychologist, Antichrist*. Princeton UP, 1950.
- Li, Stephanie. "Existentialism." *Richard Wright in Context*, edited by Michael Nowlin, Cambridge UP, 2021, pp. 263–72.
- Mangione, Jerre. *The Dream and the Deal: The Federal Writers' Project, 1935–1943*. Syracuse UP, 1996.
- Ratner-Rosenhagen, Jennifer. *American Nietzsche: A History of an Icon and His Ideas*. U of Chicago P, 2012.
- . *The Ideas That Made America: A Brief History*. Oxford UP, 2019.
- Redding, Jay Saunders. "The Alien Land of Richard Wright." *Soon, One Morning: New Writing by American Negroes, 1940–1962*, edited by Herbert Hill, Knopf, 1963, pp. 50–59.
- Robins, Natalie. *Alien Ink: The FBI's War on Freedom of Expression*. William Morrow, 1992.
- Rowley, Hazel. *Richard Wright: The Life and Times*. Henry Holt, 2001.
- Wright, Richard. *The Outsider*. 1953. Harper Collins, 1993.
- . *Conversations with Richard Wright*. Edited by Kenneth Kinnamon and Michel Fabre, UP of Mississippi, 1993.
- . "I Tried to Be a Communist." *The God That Failed*, edited by Richard H.

Crossman. 1950. Columbia UP, 2001, pp. 115–62.

——. “Not My People’s War.” *New Masses*, 17 June 1941, pp. 8–9, 12.

ニーチェ, フリードリッヒ『悦ばしき知識』(信太正三訳), ニーチェ全集 8, 筑摩書房, 1993 年。

——. 『ツァラトゥストラ』上 (吉沢伝三郎訳), ニーチェ全集 9, 筑摩書房, 1993 年。

——. 『善悪の彼岸 道徳の系譜』(信太正三訳), ニーチェ全集 11, 筑摩書房, 1993 年。

ハイデッガー, マルティン『ニーチェ I 美と永遠回帰』(細谷貞雄監訳, 杉田泰一・輪田稔訳), 平凡社, 1997 年。

ピヒト, ゲオルク『ニーチェ』(青木隆嘉訳), 法政大学出版局, 1991 年。

リーデル, マンフレート『ニーチェ思想の歪曲——受容をめぐる 100 年のドラマ』(恒吉良隆, 米澤充, 杉谷恭一訳), 白水社, 2000 年。

*Synopsis*

## The Century of Wars: Richard Wright's *The Outsider*

Mikako Takeuchi

Richard Wright (1908–60) pioneered African American literature with his thoroughgoing accounts of ghetto life. Many critics thought that Wright had lost his earlier grip on American culture in *The Outsider* (1953), which was published after his expatriation to France. This essay reevaluates the controversial novel from two perspectives: the author's criticism of American political intolerance and his comprehension of existential philosophy.

Wright wrote *The Outsider* at the height of McCarthyism, which pursued him from Washington D.C. to Paris. He had seceded from the Communist Party in opposition to its endorsement of the United States' entry into World War II, insisting that the anti-Fascist fight overseas contradicted the domestic racism symbolized by the segregation of the U.S. Army. Wright became a target of the Federal Administration during the Cold War due to his former membership in the Communist Party and his outright criticism of the nation's racism. He was doubly hounded by the CPUSA's defamation and the FBI's surveillance. The anti-hero of *The Outsider*, a nightmarish serial murderer named Damon, embodies the author's fear that humanity might be destroyed by totalitarian powers.

The philosophical import of the novel is represented by the District Attorney of New York, a character whose vital role in the novel has received insufficient critical attention. “Man is the only being who makes promises.” Wright quoted this aphorism from Friedrich Nietzsche’s *The Genealogy of Morals* as the epigraph of *The Outsider*. The District Attorney, Houston, directs Damon to the meaning of “promise.” Houston discovers Damon’s misreading of existential philosophy and identifies him as the criminal. By not enforcing the law against Damon’s perfect crime, Houston inflicts an ultimate punishment on him in the form of undeserved freedom.

*The Outsider* is Wright’s criticism of the total and absolute. Respect for the sacredness of human freedom and individuality, which was the essence of the Declaration of Independence in 1776, paradoxically informed the core of Wright’s “Un-Americanism” in the mid-twentieth century.